被爆75年企画展

広島平和記念資料館のあゆみ 第二部

8月6日へのまなざし

―資料を守り伝え続ける

はじめに

広島平和記念資料館は開館から65年が経ちました。資料館の収蔵資料は被爆者や親族等から寄贈を受けたもので成り立っています。こうした資料を基に被爆の実相を伝える姿勢を開館以来貫く一方、新たな情報を追加し、さまざまな手法を取り入れながら、資料館は展示内容を変化させてきました。

今回の企画展は、「広島平和記念資料館のあゆみ」第二部として、第一部「礎を築く－初代館長 長岡省吾の足跡」で紹介した後の1970年代から現在に至る資料館のあゆみを伝えます。現在、収蔵されている資料がどのような経緯で収集・整理されたのか、またどのような計画に基づき展示がつくられてきたのか。その軌跡をたどりながら資料に向き合う人々の姿を通してその思いに触れ、資料を守り後世に伝え続ける大切さを実感していただければと思います。

①

平和記念公園を北に望む

1975年（昭和50年）6月

広島平和記念資料館（現在の資料館本館）を中央に、東に広島平和記念館（現在の資料館東館）、西に広島市公会堂（現在の広島国際会議場）の建物が並んでいます。設計した丹下健三グループの案では、渡り廊下でつなぐ計画でしたが、予算の関係上、それぞれの建物が独立していました。

開館以来最初の常設展示更新

開館20年にあたる1975年（昭和50年）に資料館は初めての大規模な改装工事を行いました。当時、遺品や原爆被災写真だけでなく、住友銀行広島支店の「人影の石」や広島陸軍被服支廠のレンガ塀などの大型資料も寄贈され、質量共に資料の充実が図られる一方、ガラス張りの展示室は外気や日光の影響を受けやすく、展示資料の劣化が懸念されるなどの課題も指摘されるようになっていました。

改装工事では新たに空調設備を導入し、展示室の窓に外光を防ぐ紫外線反射フィルムを貼るなど展示室の環境を整えました。開館以来長く展示されてきた資料の現状調査も行い、展示資料を後世に残していくための保存対策を始めました。

施設面の整備に加え、被爆資料であふれていた常設展示室は資料点数を厳選し、時系列で系統立った展示構成で原爆被災の状況が理解できるよう内容を一新しました。

衣服展示の変遷

②

衣服の展示を見る人々

人の被害を伝える衣服の展示は開館当時からさまざまな方法が模索され、等身大のマネキンに着せたり、額縁に入れた展示をしていました。いずれも外光が資料に直接あたるため、日焼けによる劣化が懸念されていました。

③

初期の三人の中学生の遺品の展示

1973年（昭和48年）ごろ

現在も本館で展示している3人の中学生の遺品を組み合わせた展示は、早くから館のパンフレットで紹介され1967年（昭和42年）から全国の百貨店を会場に開催された巡回展示にも用いられました。

その後、1970年代前半には現在の籐製のマネキンに着せ替えられることになりました。

名簿公開と似島遺品

記念館での死没者名簿の公開 ④

1968年（昭和43年）7月21日

1968年（昭和43年）7月から広島市は記念館で原爆死没者名簿や原爆供養塔納骨名簿などの一般公開をはじめました。当初は年に一回、毎年夏に公開をしていましたが、後に常設公開となり、1993年（平成5年）まで記念館に名簿を閲覧できる一角を設けました。そこには長い間安否不明となっている家族や知人の消息を追う人々の姿がありました。

似島で発掘された遺品 ⑤

1971年（昭和46年）には、似島で遺骨の発掘作業が行われ、約60点の遺品が収集されました。これらの遺品は記念館で展示され、身元が判明して遺族へ引き渡されたものもありました。

⑧

大型被爆資料の移設

「人影の石」の移設 ⑥

1971年（昭和46年）2月

住友銀行広島支店の「人影の石」は現地で保存し、公開されていましたが、ビルの建て替え工事に伴い、資料館に移設することになりました。写真は館内に設置しているところです。

広島陸軍被服支廠のレンガ塀の移設 ⑦

1972年（昭和47年）

このレンガ塀は、広島陸軍被服支廠の二つの建物にはさまれた位置にありました。もともと塀にひずみがあったところへ、強烈な爆風によって塀の上部がずれ山形に持ち上がりました。下水道工事のため撤去されるのに伴い、壁の一部を資料館に移設することになりました。写真は資料館への移設のため分割して切り出す準備をしているところです。

展示室に運び込まれる相生橋の橋桁

1981年（昭和56年）10月

相生橋は1977年（昭和52年）から橋の架け替え工事が始まり、撤去された橋桁の一部を資料館で保存・展示することになりました。

ジオラマ展示の導入

⑨

初期のジオラマ展示

1973年（昭和48年）ごろ

1970年前後には「被爆当日の夜」と題したジオラマ展示が新たに設置されました。背景に描かれた絵に赤色のライトを照らし、手前に崩れたレンガや溶けて変形した瓦、金属の塊、焼けた金属の部品などの資料を配置しました。当時の様子の再現を試みた展示でした。

⑩

人形の設置

1973年（昭和48年）8月には、当時の人々の状況を視覚的に伝える展示手法として、ろう人形を配置したジオラマが設置されました。設置前からこのジオラマについては被爆者や関係者、市民の間で賛否が分かれました。ジオラマの人形は複数の被爆者からの聞き取り調査や被爆体験記をもとに専門業者が制作し、背景画は被爆者でもある画家の福井芳郎氏が監修しました。

⑪

1991年（平成3年）の展示更新後のジオラマ

1991年（平成3年）8月2日

その後、1991年（平成3年）の展示更新にあわせてジオラマも新たに作られ、2017年（平成29年）の常設展示の更新まで展示されていました。新たに作られたジオラマは以前の展示ケースが取り払われ、あたかも来館者が被爆直後の市内を歩いているかのような展示手法が取り入れられました。

資料の収蔵状況

⑫

かつての収蔵庫

1983年（昭和58年）7月15日

資料館の所蔵資料は種別ごとに分け、金属製の収納箱に入れて保管していました。被爆した瓦や石などの資料は箱や収蔵庫にも収まりきらず、展示室の廊下でも展示をしていました。

⑬

かつての資料保存箱

この金属製の箱は近年まで使っていた大型のものです。箱の脇には刀剣や歩兵銃などの長さのある資料を収めていたことを記すラベルが貼られています。

展示室の変遷と課題

被爆パノラマを中心にした展示品を見る入館者たち ⑭

1973年（昭和48年）8月2日

被爆後の広島市内の惨状を表したパノラマ模型は当初から設置されていましたが、その後、改良を重ね、1969年（昭和44年）には3代目のパノラマが設置されました。模型の範囲を広げ、中央に天井から火球を吊るし、原爆の爆発点を視覚的に伝える工夫を取り入れました。

光が差し込む展示室 ⑯

1973年（昭和48年）ごろ

ガラス張りの展示室には一日中外光が差し込むため、資料が日焼けし、特に衣服のような被爆資料は傷みやすく、その対策が課題となっていました。また、開館当初から空調設備はなく、雨が吹き込み、鳩のふんによる被害も抱えるなど、展示室の環境改善が課題となっていました。

解説テープの貸出 ⑮

1971年（昭和46年）7月26日

この子どもは館内解説テープを聞きながら展示を見ています。解説テープは1964年（昭和39年）に英語版、1965年（昭和40年）に日本語版の貸出が始まり、1970年（昭和45年）にはフランス・ドイツ・スペイン・ロシア語が加わりました。

パネルの書体や文字の大きさの不統一 ⑰

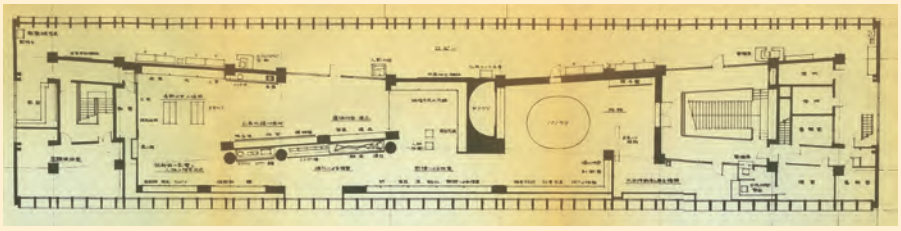
展示室には床面近くにも多くの被爆資料が展示されていました。開館以来、徐々に展示点数が増えたため、説明文の文字の書体や大きさ、レイアウトが統一されていないことも課題となっていました。この写真では慰霊碑の写真パネルにそれぞれの碑文を記した縦書きの文章が額装で添えられ、写真パネルの下に置かれた被爆資料には日英併記の説明板が添えられています。

パネルレイアウトの不統一

各コーナーに6言語のタイトルパネルが追加されましたが、大きさも位置も設置場所にあわせて決められ、一定ではありませんでした。

⑱

最初の大規模な改装工事



⑲

広島平和記念資料館展示場改装工事基本計画平面図

1975年（昭和50年）2月

資料館と隣接する記念館の両館のあり方をあわせて検討するため、1971年（昭和46年）5月に平和記念施設整備改善委員会が新たに設置され、翌1972年（昭和47年）1月には「整備改善三か年計画」を作りました。資料館は課題であった展示室の環境を整え、被爆の実相を分かりやすく伝える施設として展示内容を一新することになりました。

㉑

展示室の照明と展示資料の入替

室内に壁を新設したことから、室内の照明も新設し、天候に関わらず一定の明るさを保つ空間を作りました。また、展示資料の保護のために室内の照度を落とし、展示する資料の点数も厳選しました。紙製品の資料や衣服は照明による光や熱を受け続けることで劣化するおそれがあるため、定期的に資料を入れ替えることにしました。

⑳

展示室内に新たに設置された壁

改装前は外光が展示室に直接入る構造になっていましたが、展示室の中に光をさえぎる壁を新たに設け、室内の温湿度が外光の影響を受けにくくしました。写真パネルの大きさも統一されたデザインになりました。

㉒

㉓

展示パネルの規格統一

展示室内のパネルを種類ごとに全て同じ規格で作り替えることでデザインの統一をはかりました。展示ゾーンの説明パネル（写真左の黒いパネル）と展示ケースの中の説明パネル（写真右の右端の白いパネル）のように、性質ごとにパネルのデザインも区別して作りました。

㉔

遺品箱の導入

被爆者の遺品は改装前も展示していましたが、この大改装の時に木目調の遺品箱を新たに作りました。遺品を丁重に扱う姿勢を展示上にも取り入れ、似島から発掘された持ち主のわからない遺品もこの箱に納めました。また、箱の脇（写真左奥）には展示室内の環境を計測する温湿度計が設置されています。

㉕

展示資料の保存対策

1979年（昭和54年）8月6日

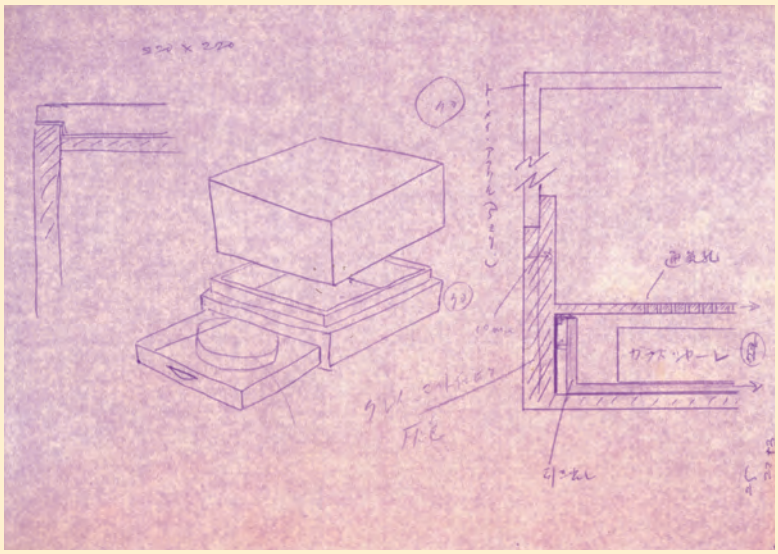
展示資料に当てる照明から発せられる熱は資料を劣化させるおそれがあるため、展示ケース内の熱や湿度を調整できるように工夫しました。展示ケースの照明の熱を外に逃がすために作られた小さな通気口がケース中央の上部についています（写真中央）。

㉖

資料保存のための展示ケースの制作

1979（昭和54）年7月18日

1975年（昭和50年）の展示更新を前に資料館は開館以来はじめて学芸員資格を持った専門職員を常勤で雇用しました。1974年（昭和49年）8月に着任してすぐに資料館の展示室の環境調査を国立東京文化財研究所の協力を得て行い、被爆資料の保存に向けた取り組みに着手しました。



㉗

資料保存対策を講じた展示ケースの制作

1975年（昭和50年）ごろ

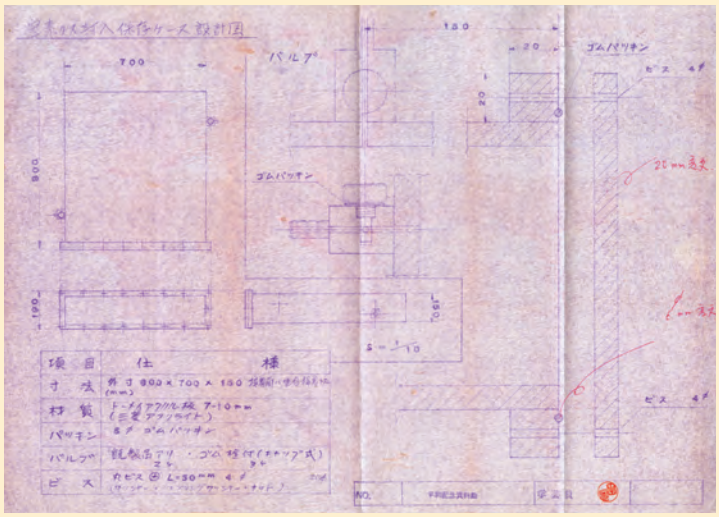
この図面は、資料の劣化を防ぐため、展示ケースの底面に防虫剤と湿度の調整剤を展示ケースの底面に入れられるよう二重底にしていたことを伝えています。

新たな収蔵資料と展示の広がり

最初の常設展示更新と前後して、アメリカから収集した原爆被災写真や被爆者自身が当時を思い起して描いた「市民が描いた原爆の絵」などが新たに資料館の収蔵資料に加わりました。こうした資料の展示会が広島平和記念館で行われ、多くの人たちの関心を呼びました。

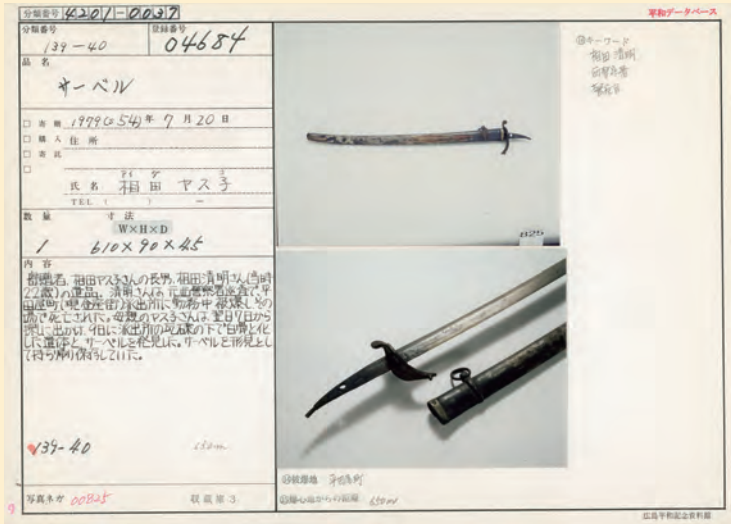
また、資料が増加するにつれて、従来からの資料の整理や収蔵方法の見直しも進みました。資料一点ずつの写真を撮影し、新たに資料カードをつくりました。

収蔵庫に資料を保管するだけでなく無償で資料を日本の国内各地に貸し出す試みも始まりました。



資料保存ケースの開発 ㉘

資料館の展示更新が終わった後も、傷みやすい被爆した衣類の保存対策の検討を続け、国立東京文化財研究所の指導の下で窒素ガスをアクリルケースに封入する方式の保存ケースの開発も試みました。予算上の理由等から実用化には至りませんでしたが、貴重な被爆資料を後世に残すための保存対策の試みの一つでした。



資料カードの導入 ㉚

開館以来、数多くの収集資料や寄贈資料が展示室に置かれていましたが、1975年（昭和50年）の展示更新にあわせて収蔵庫を増やし、展示資料も厳選することにしました。常時温湿度管理が可能な収蔵庫も新設し、全ての収蔵資料の写真撮影と資料カードの作成を開始しました。

㉙

窒素ガス封入保存ケースの付属器具

国内外への資料の貸出 ㉛

1980年（昭和55年）4月4日

1979年（昭和54年）に収蔵資料を国内各地に無償で貸し出す試みが始まり、翌年6月には広島青年会議所（JC）と広島市が計画を進めていたアメリカ議会の上院議員会館での原爆展が実現しました。写真では、収蔵庫で当時の学芸員がアメリカへ貸し出す被爆資料の確認をしています。その後、1983年（昭和58年）にはアメリカ・ニューヨークの国連本部で被爆資料を常設展示するコーナーが作られることになりました。

第1回「市民の手で原爆の絵を」展の展示風景
1974年（昭和49年）8月
1974年（昭和49年）5月に、一人の被爆者がテレビドラマを見て当時のことを思い起こして描いた一枚の絵をNHK広島放送局に寄せました。これをきっかけに同局は1974年（昭和49年）と1975年（昭和50年）に「原爆の絵」の募集を呼びかけ、2,225枚の絵が寄せられました。1974年（昭和49年）8月には記念館の会議室で初めてその展示会が開催され、多くの人が詰めかけ、反響を呼びました。

㉜

記念館での展示風景
1980年（昭和55年）8月2日
1975年（昭和50年）12月にはNHKから広島市に「原爆の絵」が寄贈されました。全国に巡回展示されることになり、絵をビニールパウチで保護した状態で館外に貸出していました。現在は原画の保存に重点を置き、2000年代にNHKと共同で8Kカメラでの撮影を行い、高精細画像データを展示に活用しています。

㉝

爆風で吹きとばされた「真暗闇がすぎた直後」
1945年（昭和20年）8月6日
爆心地から1,710m　比治山橋西詰　升川貴志栄 作

㉞

亡くなった家族を火葬する
1945年（昭和20年）8月6日〜10日ごろ
庚午北町五丁目　吉本智 作

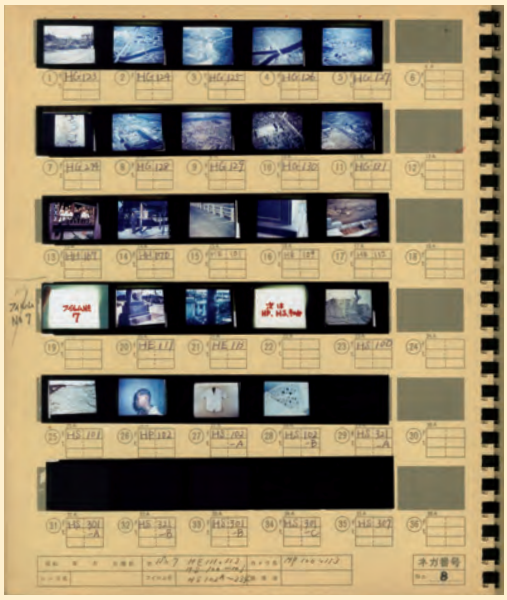
㉟

㊱

記念館で開かれた「ヒロシマ・ナガサキ返還被爆資料展」

1973年（昭和48年）8月7日

1960年代後半から日本政府は、アメリカが持ち帰った被爆後の広島・長崎を記録した映画フィルムなどの返還を求める交渉を行い、返還された資料の公開によって徐々に被害の詳細が明らかになりました。1973年（昭和48年）5月にはアメリカ陸軍病理学研究所が保管していた写真が返還され、被爆後の負傷者の様子を撮影した写真などが多くの人々の目にふれることになりました。



㊲

アメリカ陸軍病理学研究所から返還された写真

㊳

㊴

アメリカ国立公文書館から収集された写真

1973年（昭和48年）には、アメリカ国立公文書館に原爆関係の資料が数多く所蔵されているという情報が広島市と長崎市にもたらされました。両市は職員を現地に派遣し、文書や写真などの資料を収集しました。

㊵

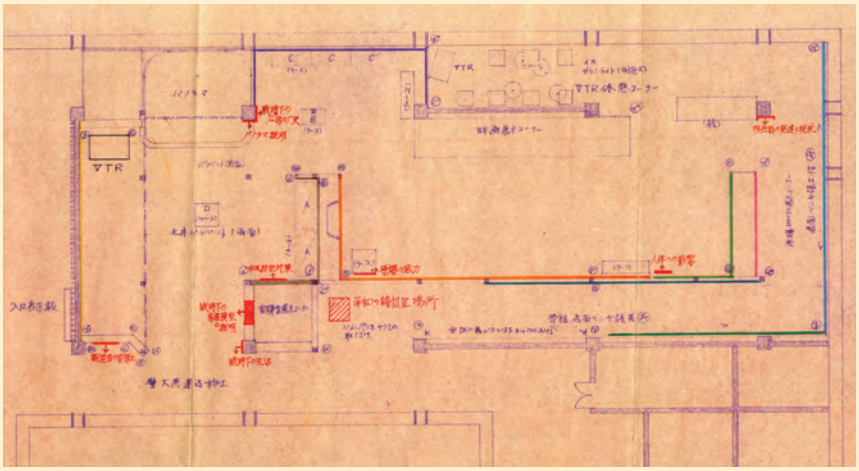
「広島原爆被災撮影者の会」写真集出版のための初会合

1978年（昭和53年）9月4日

1978年（昭和53年）7月15日に原爆投下直後に市内に入ったカメラマンたちによる「広島原爆被災撮影者の会」が結成されました。このカメラマンたちが撮影した写真は約3,000枚にものぼり、フィルムの所在とデータを明らかにし、「原爆写真の戸籍簿」を作るためにこれらの記録写真の保存に取り組みました。1981年（昭和56年）には『ヒロシマ壊滅のとき―被爆カメラマン写真集』を刊行し、現在でも多くの写真が原爆の惨状を伝えています。

広島平和記念館との一体化へ

広島平和記念資料館と同時期の1955年(昭和30年)に開館した広島平和記念館では被爆前の暮らしや核兵器の状況などの常設展示が設けられ、新たに寄贈された資料の展示や企画展などの会場にもなりました。被爆から40年が経過し、資料館の入館者は140万人を超え、館内の混雑への対応や資料館と記念館の展示の連携を図るため、両館を原爆の惨禍を伝える総合的な平和記念施設として活用することが構想されました。この構想を基に展示更新の計画が進み、まず資料館本館が1991年(平成3年)に、開館以来2度目の常設展示更新を行いました。続いて1994年(平成6年)に記念館が改築され、広島平和記念資料館の東館として開館しました。



記念館1階の常設展示 ㊶

1973年(昭和48年)

1973年(昭和48年)4月、記念館の1階に戦時下の市民生活や原爆による被害、当時の核兵器の状況などを伝える常設展示がつくられました。翌年も整備が進み、2階に被爆後の復興や平和運動を伝える常設展示がオープンしました。

戦時下の家屋の模型 ㊷

1973年(昭和48年)4月

「戦時下の市民生活」は衣・食・住をテーマとしていました。住をテーマとした展示では、当時の家屋が模型で再現されました。空襲に備える様子が再現され、家の周りには防火用水槽や防空壕が設置されました。

「原爆による被害」の展示 ㊸

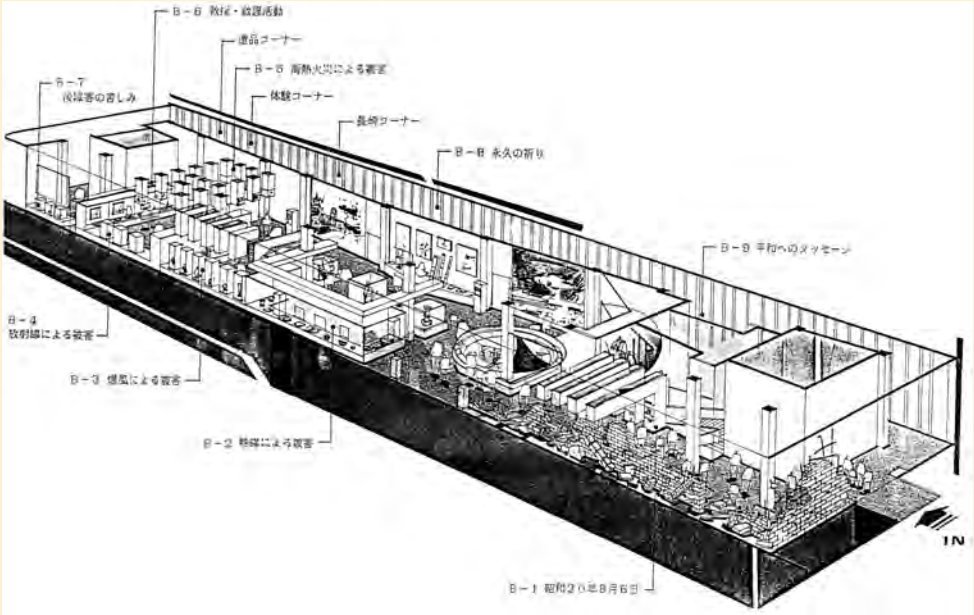
1973年(昭和48年)4月5日

原爆の放射線量や原爆による死傷者数など、被害の実態を伝えるさまざまなデータを紹介し、医学、物理学、社会学的な影響の観点から展示を構成しました。広い空間には丸木位里・俊夫妻が制作した「原爆−ひろしまの図」が展示されました。

特別展の開催 ㊹

1978年(昭和53年)7月26日

その後も記念館の内部改修が行われ、1978年(昭和53年)には一般に開放されていた会議室が特設展示場や図書室などに変わりました。特設展示場では資料館の収蔵庫に保管されている資料を活用するため、特別展が開催されました。写真の「ヒロシマ動員学徒の遭難」展では、資料館で収蔵する動員学徒の遺品や市内の学校から借用した動員日誌などが展示されました。



⑮

基本計画での資料館の展示室イメージ

1987年(昭和62年)3月

記念館と一体化することで混雑する資料館の展示面積を拡大し、より強く訴える展示内容とするため、記念館と資料館の機能や展示を全面的に見直すことが始まりました。資料館は従来からの被爆の実相を伝える展示とし、原爆の熱線、爆風、放射線による破壊のすさまじさと悲惨さを実物資料を中心に伝える方針で整備されました。

⑯

遺品の展示

1991年(平成3年)8月1日に資料館本館は2度目の大改修を終え、開館しました。原爆の威力だけでなく人の被害を伝えることに力を注ぎ、建物疎開作業に動員されて亡くなった生徒たちの遺品などが並びました。また、同級生の学生服を隣あわせで展示したり、解説文に資料の説明だけでなく、家族の思いを加える工夫もしました。

⑰

⑱

視覚に訴える展示

1991年(平成3年)

左　被爆直後を再現したジオラマ

右　被爆後の広島市内のパノラマ模型と大型映像

子どもたちに分かりやすいように視覚に訴え、臨場感のある展示とするため、実物資料だけでなく、模型や映像が取り入れられました。本館の導入部には被爆直後の街を再現したジオラマが配置されました。レンガ造の建物を模した造作が立ち、足元にはレンガが敷き詰められました。被爆後の広島市内のパノラマ模型の上には大型モニターを設置し、廃虚となった街等の映像を投影しました。

記念館の改築

左　取り壊される旧記念館　1992年(平成4年)

右　改築後の記念館(資料館東館)　1994年(平成6年)4月

資料館のリニューアルに続いて、1992年(平成4年)に記念館の改築が始まりました。既存の建物を取り壊し、同じ場所に新たな建物を建設しました。また1949年(昭和24年)の設計当初からあった資料館と記念館を渡り廊下でつなぐ構想が改築を機に実現しました。

広島平和記念資料館東館の開館

1994年(平成6年)6月1日

改築した記念館は1994年(平成6年)6月1日に広島平和記念資料館東館として開館しました。以前の記念館の展示構成を基にし、写真パネルや映像、模型で被爆前から現在までの広島のあゆみを紹介しました。特に1階では、城下町から軍都となっていく広島の歴史と戦争との関わりについて伝える展示にスペースが割かれました。また、東館1階から3階までの吹抜空間には、視覚的に訴求力のある展示とするため、縮尺約70パーセントの原爆ドームの円蓋部分の模型が設置されました。

収蔵庫に収められた遺品

資料の保存機能を集約するため、改築を機に地下1階に新しい収蔵庫を3室設けました。資料館本館に収蔵されていた資料を東館の収蔵庫に移し、一定の温湿度を保ち一元的に管理するようになりました。亡くなった人たちが身に付けていた衣服や靴などは、和紙で1点1点包み、桐のたんすに保管しています。

一人ひとりの姿を伝える

「どのようにしたら資料一点一点に向き合うことができ、亡くなった人たちや寄贈者の思いを感じてもらうことができるのだろうか」。最初の展示更新時から取り組んできた課題であり、そのための展示手法が工夫されてきました。こうした展示には資料の背景情報が必要となってきます。過去に寄贈された資料の中には詳しい内容が分からないものもありました。1999年(平成11年)から寄贈者や関係者に改めて被爆当時の状況など、資料の内容を確認する実態調査が進められました。その後も資料の寄贈時には当時の状況や寄贈者の思いなど詳しい聞き取りをしています。

収蔵資料に関する調査票の発送準備 ⑬

1999年(平成11年)11月17日

実態調査では、連絡先の分かる寄贈者388人へ調査票を送りました。電話での聞き取りも行いながら、被爆当時の様子や寄贈した資料への思いなどについて情報を集め、展示やデータベースに反映させました。

資料の保存処理 ⑭ ⑮

左　保存処理前の三輪車

右　保存処理後の三輪車　1998年(平成10年)5月6日

資料の情報を残すだけでなく、被爆し損傷の大きい資料の劣化を食い止め、保存する取り組みも進められました。原爆で亡くなった銕谷伸一ちゃん(当時3歳)の三輪車は、40年間地中に埋められていたため、1985年(昭和60年)に寄贈された時は全体が錆び、前輪部と後輪部に分かれていました。当初はそのまま展示されていましたが、1997年(平成9年)に保存処理が施されました。錆の要因となる塩分が取り除かれ、樹脂を用いて資料の補強や前輪部と後輪部をつなぐ作業が行われました。

三輪車：銕谷信男 寄贈

資料のレプリカ(複製)の製作

1998年(平成10年)5月6日

長期間の展示による資料劣化の懸念や、国内外の原爆展への貸出に対応するため、1996年(平成8年)度からレプリカの製作も進められました。写真は、被爆10年後に白血病で亡くなった佐々木禎子さんが自身の血液検査の数値を記した「病床記録」と建物疎開作業に動員されて亡くなった女子生徒が履いていた下駄で、いずれも右がレプリカで左が実物です。

「病床記録」：佐々木繁夫 寄贈

下駄：井上冨子 寄贈

⑯

⑰

建物の保存と3回目の展示更新へ向けて

2008年(平成20年)4月11日

第1回広島平和記念資料館展示整備等基本計画検討委員会

2000年代に入ると、資料館の開館から50年が近づき、建物の老朽化や被爆者が高齢化する中でどのように被爆体験を継承していくかが課題となりました。2003年(平成15年)度に資料館の展示や運営などについて、国内外の学識経験者や来館者との面談や意見募集などを行い、具体的な課題を抽出しました。その課題を基に翌2004年(平成16年)から建物の保存や展示内容の全面的な見直しのための検討が始まりました。

建物疎開作業で亡くなった生徒たちの遺品(集合展示)のレイアウト検証

2018年(平成30年)6月7日

検討を進める中で、本館展示は従来の熱線、爆風、放射線、高熱火災という物理的な側面による展示構成から大きく変わりました。被害を受けた人の視点に立ち、8月6日当日の混沌とした状況と一人ひとりの被害の実態を伝える展示構成となりました。被爆資料、原爆被災写真、市民が描いた原爆の絵など実物資料で伝えることに重点を置き、展示手法の検討を重ね、展示シミュレーションを行いながら展示をつくりあげていきました。

⑱

⑲

リニューアルオープン当日の本館展示室「魂の叫び」コーナー

2019年(平成31年)4月25日

展示整備の検討の始まりから15年近い歳月をかけ、2017年(平成29年)4月26日に東館が、2019年(平成31年)4月25日に本館がリニューアルオープンしました。中でも本館展示室の「魂の叫び」コーナーでは、来館者に人の姿を思い浮かべ、被爆者や遺族の思いに共感し、より身近に捉えてもらいたいと考えています。この展示をつくることができたのは、実態調査や寄贈者からの聞き取りなどで蓄積した資料の背景情報があったからでした。

おわりに

被爆から75年を経た今もなお、資料の寄贈は絶えず、収蔵資料は増え続けています。資料は被爆の惨状を伝えるだけでなく、犠牲者の在りし日を偲び、生きた証を伝えるものです。寄贈者から託された資料を保存し、その記録を残していくために、担当者はその時代ごとの限られた人員と予算の中で思い悩み、次の時代へつないできました。

現在も原爆の放射線による影響が人々を苦しめ、世界には数多くの核兵器が存在します。「もう二度と原爆の惨禍を繰り返さないために」資料館の、8月6日を見つめ伝える日々はこれからも続いていきます。

図版一覧（敬称略）

①⑲広島市公文書館提供　②⑮⑰⑱佐々木雄一郎撮影　塩浦雄悟提供　③⑤～⑨⑩⑬⑯⑳～㉔㉗㉘㉚㉜㉞㉟㊶㊺㊼～㊾㊿52⑤⑦～㊾広島平和記念資料館所蔵　④⑪⑫⑭㉕㉖㉛㉝㊱㊵㊹㊿㊸㊺㊻中国新聞社提供　㉙横田（旧姓 田河）禎昭提供　㊲アメリカ軍撮影　㊳㊴アメリカ戦略爆撃調査団撮影　アメリカ国立公文書館所蔵　㊷㊸株式会社みづま工房提供　㊻株式会社YAMAGIWA提供

表紙写真　左上　中国新聞社提供　右下　中国新聞社提供

被爆75年企画展
広島平和記念資料館のあゆみ　第二部　8月6日へのまなざし－資料を守り伝え続ける
期間　2021年2月27日（土）～7月18日（日）
会場　広島平和記念資料館東館1階企画展示室
発行　広島平和記念資料館学芸課
730-0811　広島市中区中島町1-2
TEL 082-241-4004　FAX 082-542-7941　http://hpmmuseum.jp/